

多肥小学校校舎等建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

松ノ内遺跡

2020年3月

高松市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、高松市立多肥小学校校舎等建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、松ノ内遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地並びに調査期間は次のとおりである。

調査地	高松市多肥上町字松ノ内 1001 ほか
発掘調査	平成 30 年 7 月 1 日～7 月 24 日
	令和元年 7 月 1 日～7 月 12 日
工事立会	平成 30 年 8 月 1 日～平成 31 年 1 月 31 日
整理作業	平成 31 年 2 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
調査面積	927.5 m ²
- 3 発掘調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 高上拓、同非常勤嘱託職員 中西克也・大迫敏美が担当した。
- 4 本報告書の執筆及び編集は大迫が担当した。
- 5 本調査に関する以下の業務を委託した。
遺物写真撮影：西大寺フォト
- 6 本報告書の高度値は海抜高を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。
- 7 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SA : 横列 SH: 縦穴建物跡 SD : 溝 SK : 土坑 SP : 柱穴 SX : 性格不明遺構
- 8 遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。
- 9 本報告書の挿図として、2 万 5 千分の 1 の高松市都市計画図を一部改変して使用した。
- 10 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 11 本報告における遺構番号は、調査時に付与されたものから一部変更をしている。変更があつたものについては、調査諸記録へ変更点を書き記している。

目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過	
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3-4
第3節 既往の調査	5-6
第3章 発掘調査及び整理作業の成果	
第1節 調査の方法	7
第2節 層序	8
第3節 遺構・遺物	
第1調査区（平成30年度調査区）	9-19
第2調査区（平成31年度調査）	19-23
第4調査区（平成30年度工事立会）	23-26
第4章 総括	
第1節 調査成果について	28
参考文献	29

挿 図 目 次

第 1 図 高松平野における松ノ内遺跡の位置 ······	2 第 12 図 SX13 平・断面図と出土遺物 ······	19
第 2 図 松ノ内遺跡周辺の遺跡分布図 ······	4 第 13 図 第 1 調査区包含層出土遺物 ······	19
第 3 図 多肥周辺調査地図 ······	第 14 図 第 2 調査区遺構配置図 ······	20
(一部追加・改変) ······	7 第 15 図 第 2 調査区第 1 遺構面、第 2 遺構面検出遺構 ······	20
第 4 図 松ノ内遺跡調査区配置図 ······	9 第 16 図 第 2 調査区 SA14 平・断面図 ······	21
第 5 図 土壇図 ······	10-11 第 17 図 第 2 調査区 SP17 ~ 25 平・断面図 ······	22
第 6 図 第 1 調査区遺構配置図 ······	13-14 第 18 図 黒色土中出土遺物 ······	23
第 7 図 SD1.2 平・断面図と出土遺物 ······	15 第 19 図 第 4 調査区遺構配置図 ······	23
第 8 図 SD3.4 平・断面図 ······	16 第 20 図 SD23,24,SK25,26 平・断面図と	
第 9 図 SD3.4 出土遺物 ······	SK26 出土遺物 ······	24
第 10 図 SP5~11 平・断面図 ······	18 第 21 図 SX27 ~ SX32, 噴縫 ······	26
第 11 図 SX12 平・断面図と出土遺物 ······	18	

表 目 次

第 1 表 調査区・遺構番号対照表 ······	5
第 2 表 周辺の調査履歴（香川県教育委員会 2017 より一部追加・転載） ······	25
第 3 表 遺物観察表 1 ~ 29 ······	30
第 4 表 遺物観察表 30 ~ 53 ······	31

写 真 目 次

第 1 調査区トレント北側完掘（東から） ······	I	SX13 完掘状況（北から） ······	V
第 1 調査区トレント北側完掘（西から） ······	I	第 2 調査区第 1 遺構面完掘（北から） ······	VI
第 1 調査区トレント北側完掘（北から） ······	I	SA14-P1~4（東から） ······	VI
第 1 調査区トレント南側完掘（東から） ······	I	SA14-P1 断面（東から） ······	VI
SD1, SX12 完掘状況（南から） ······	II	SA14-P2 断面（東から） ······	VI
SD1 断面（南から） ······	II	SA14-P3 断面（東から） ······	VI
SX12 断面（南から） ······	II	SX15 断面（西から） ······	VI
SX12 完掘状況（東から） ······	II	SP17 断面（東から） ······	VI
SD2 断面（南から） ······	III	SP16 断面（南から） ······	VII
SD2 完掘状況（南から） ······	III	SP18 完掘状況（西から） ······	VII
SD2 完掘状況（西から） ······	III	SX19 断面（南から） ······	VII
遺物出土状況（18） ······	III	SX20 断面（東から） ······	VII
遺物出土状況（21） ······	III	SX20 南側断面（東から） ······	VII
SD3, SD4 断面（南から） ······	IV	SX20 北側断面（東から） ······	VII
SD3 完掘状況（北東から） ······	IV	第 2 調査区第 2 遺構面完掘（北から） ······	VII
SD3 完掘状況（西から） ······	IV	SP21 断面（東から） ······	VII
SD4 完掘状況（南から） ······	IV	SP22 断面（東から） ······	VII
SD4 完掘状況（北から） ······	IV	第 3 調査区第 1 遺構面完掘（西から） ······	VII
SP5 断面（南から） ······	V	第 3 調査区第 2 遺構面完掘（西から） ······	VII
SP6 断面（南から） ······	V	第 3 調査区完掘（西から） ······	VII
SP7 断面（南から） ······	V	遺物写真（3,15,16） ······	IX
SP8 断面（南から） ······	V	遺物写真（18） ······	IX
SP9,10 断面（南から） ······	V	遺物写真（37） ······	IX
SP11 断面（南から） ······	V	遺物写真（21） ······	IX

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

調査地は高松市教育委員会総務課（以下、教育総務課）が当該地で計画する多肥小学校の校舎等建設予定地にあたる。埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため、平成30年2月21～22日に試掘調査を実施した。

この調査によって本事業地の一部において埋蔵文化財の包蔵状況が確認されたため、周知の埋蔵文化財包蔵地「松ノ内遺跡」として登録された。

本事業は平成30年度に道路整備、運動場造成、平成31年度に屋外便所、倉庫の建設工事が計画された。事業着工に先立ち、平成30年5月30日付けで高松市長から文化財保護法第94条第1項に基づく発掘通知が提出され、香川県教育委員会（以下県教委）へ進達したところ、平成30年6月6日付けで道路整備工事箇所は「発掘調査」、運動場造成工事箇所は「工事立会」の行政指導があった。これを受け、本市文化財課は市教委総務

課と協議し、平成30年7月2日～24日の期間で発掘調査を実施し、平成30年8月9日～平成31年1月31日の期間で断続的に工事立会を実施した。また、屋外便所、倉庫の建設工事部分は、平成31年4月15日付けで高松市長から発掘通知が提出され、県教委へ進達したところ、平成31年4月18日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受け、令和元年7月1日～12日にかけて発掘調査を実施した。

なお、平成30年度発掘調査範囲（道路整備工事箇所）を「第1調査区」、平成31年度発掘調査範囲（屋外便所・倉庫建設工事部分）を「第2・3調査区」、平成30年度工事立会範囲（グランド周囲擁壁部分）を「第4調査区」とした。（第4図 松ノ内遺跡調査区配置図参照）

第2節 発掘調査及び整理作業の経過

松ノ内遺跡における発掘調査の経過は以下のとおりである。

平成30年7月2日	第1調査区の重機掘削。	令和元年 7月1日	第2・3調査区の重機掘削。
7月3日	土器No1、No2を取り上げ。		第3調査区完掘。
7月10日	現場再開。	7月8日	第2遺構面の重機掘削。
7月19日	掘削終了。		第3遺構面の有無の調査。
7月20日	写真撮影。		確認されなかった為、調査完了。
7月24日	埋め戻しの際に2面目の 有無の調査。	7月12日	埋め戻し完了。調査完了。
	確認されなかった為、調査完了。		
8月9日	工事立会開始。		
平成31年1月31日	工事立会完了。		

整理作業については、平成31年2月1日より発掘調査及び工事立会に伴う、遺物の洗浄や実測、写真撮影、図面整理、保存処理等を行い、令和2年3月末にこれらの整理作業を終え、発掘調査報告書を刊行するに至った。

第2章 地理的・歴史的環境

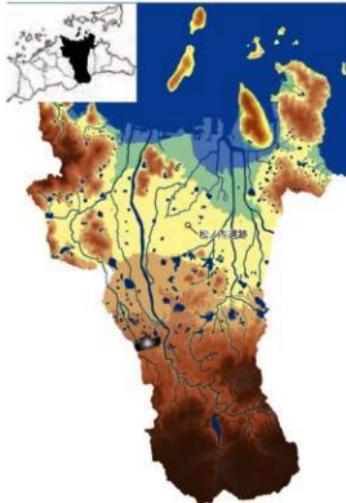
第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りの瀬戸内海沿岸に位置し、市域の北部には高松平野が広がっている。高松平野には讃岐山脈より流れ出た河川、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川が北流している。そのなかでも香東川は平野の形成に大きな影響を及ぼしており、現在の春日川以西の大部分は香東川によって形成された沖積平野とされる。

農耕に適した地味豊かな土壌をもつ地形であるが、これらの諸河川の中流域は伏流し、その表層が潤れ川になることが多かったため、早くからため池を増築することで水不足の解消がなされてきた。これらのため池は年間1,000 mm前後と雨量の乏しい温暖寡雨な、いわゆる瀬戸内式気候に属する讃岐平野において農業用水確保のため不可欠なものである。

ため池のほか、出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって農業用水の確保ができるようになった為、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は、17世紀初めの河川改修によって付け替えられたもので、それ以前にはもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没している。ほか、古い時代に埋没した旧河道は、現在は航空写真等では、林から木太地区にかけて分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池（消滅）を結ぶ流路等数本が見られ、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りをとどめている。



第1図 高松平野における松ノ内遺跡の位置

松ノ内遺跡が所在する高松市多肥上町は、平安時代から江戸時代にかけて多配・多部とされていたが、松平藩政より「多肥」となり、昭和31年に香川郡から高松市へ合併された際、大字上多肥から改変された。遺跡の東側には高松市立多肥小学校、桜木神社が、北東には高松南警察署、香川県立高松桜井高校があり、北には県道147号太田上町志度線が通る。近年、これらの整備に伴い発掘調査がなされており、その結果、周辺は大きな旧河道と東西に安定した微高地の広がる土地であることが分かっている。（松本2016）

今回の調査地で第1遺構面の標高は約24～24.5mであり、第2遺構面の標高は23.3mである。

第2節 歴史的環境

松ノ内遺跡が所在する多肥上町周辺は、県道建設や学校新設及び造成、民間開発等により、多くの遺跡で調査が行われ、各時代の様相が次第にわかり始めている。

旧石器・縄文時代

周辺において旧石器・縄文時代の遺跡はほとんど知られていない。松林遺跡（6）にて刻目突帯文を施す土器や加工木が出土したものの流路出土資料である。遺構は確認されておらず、集落の形成には至っていないと考えられている。

弥生時代

弥生時代に入り、日暮・松林遺跡（5）にて灌漑水路と思われる溝が開削されるものの、集落の痕跡は確認されていない。弥生時代中期中葉頃から日暮・松林遺跡、多肥松林遺跡（17）を中心として広範囲にわたり集落が展開された。多肥松林遺跡にて確認された旧河道を中心東側では掘立柱建物跡を、西側では竪穴建物跡を主体とした集落構成にて展開されている。しかし、この集落は中期後半まで継続しない。その理由として、松林遺跡にて確認された液状化現象の痕跡や噴礫から想定される大規模な地震や、多肥松林遺跡の西側微高地で確認された洪水砂から想定される洪水の被害を受けたことが要因のひとつであると考えられている。

以後、集落の形成されない時期を経て、弥生時代後期終末頃より再び集落が確認される。しかし、弥生時代中期中葉頃とは異なり、この時代の集落は小規模なものが点在するにとどまり、この集落も古墳時代前期まで継続しない。

古墳時代

弥生時代後期頃から古墳時代前期頃までの間、自然流路から溝へ取水するために木杭等で調整したと思われる痕跡が多肥松林遺跡にて報告されている。溝は2条報告されており、その

調整が片方を塞ぐ為であったか、流量の調整であったかは判明していない。

古代

古代に入ると現在の多肥地区（上町、下町を合わせた地域）は、香川郡多配郷（和名抄）とされた。香川郡では、多肥郷を含めて14郷が記載されており、上郡に位置づけられていた。多肥磨寺（11）が建立され、その近くに位置する多肥北原西遺跡（8）では溝等から鬼瓦や軒瓦を含む大量の瓦片のほか、多口瓶、硯が確認されている。9～10世紀頃になると、多肥松林遺跡周辺では溝等から齊串や人形、木製模造品が出土し、これらは水路の維持のほか、病氣や災いを除ける祓いを行う目的で祭祀に使用されたものと考えられている。（香川県教育委員会2016）このほか、墨書きのある須恵器・黒色土器19点が確認されている。

居住域については、松林遺跡（6）にて条里型地割と方向を一致させる掘立柱建物跡や溝状遺構が確認されている。

古代から中世頃の遺構として、松林遺跡から日暮・松林遺跡にかけて条里型地割の坪界溝及び香川郡の一条と二条の条界の溝が確認されている。

中世

多肥松林遺跡や多肥平塚遺跡にて掘立柱建物跡が検出され、小規模な居住城が形成されていたと考えられる。

出土遺物は多肥松林遺跡の灌漑水路から大量の瓦器碗が出土する。このことから、海浜部の物資集積地と南海道を連結させるアクセス道に隣接した中継地的な位置づけが指摘されている。

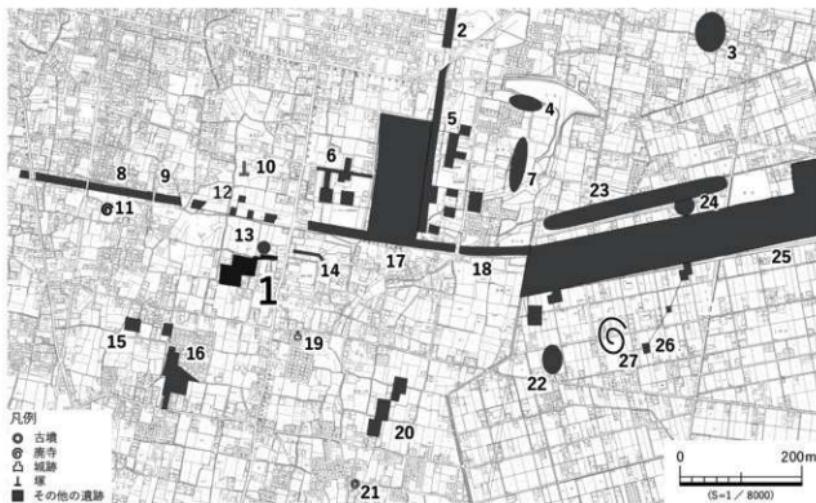
中世後半になると遺構や遺物の出土は乏しくなる。

城館遺跡として、乃生氏の居城とされる高木城（19）が多肥小学校の南側に想定されている。

近世

各遺跡で土坑や溝等の遺構が検出されているが、居住域は確認されていない。

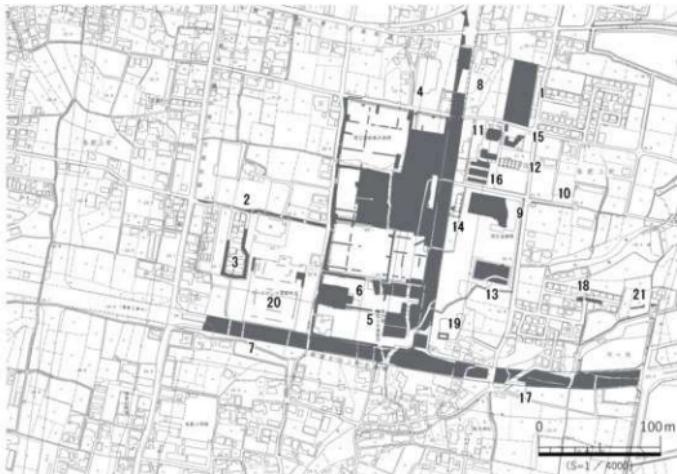
江戸時代を通じて多肥郷の石高は、1300 石前後であったと考えられている。(香川県教育委員会 2017)



第2図 松ノ内遺跡周辺の遺跡分布図

- 1：松ノ内遺跡 2：凹原遺跡 3：天皇西原遺跡 4：池の内II遺跡 5：日暮・松林遺跡
6：松林遺跡 7：池の内I遺跡 8：多肥北原西遺跡 9：多肥北原遺跡 10：平塚1号塚
11：多肥廃寺 12：多肥平塚遺跡 13：お茶荒神 14：出口遺跡 15：西久保遺跡
16：井手上・中所遺跡 17：多肥松林遺跡 18：多肥宮尻遺跡 19：高木城跡 20：野郷遺跡
21：天満宮古墳 22：畠遺跡 23：宮西・一角遺跡 24：一角遺跡 25：空港跡地遺跡
26：上林・本村遺跡 27：拝師廃寺

第3節 既往の調査



第3図 多肥周辺調査位置図（一部追加・改変）

第1表 周辺の調査履歴（香川県教育委員会 2017 より一部追加・転載）

調査名	次数	調査期間	面積 (m ²)	調査相関	報告書
松林道跡（通学路）	1次	1995.5.19～1995.11.8	1,000	高松市教育委員会	1
松林道跡（宅地造成）	2次	2004.4.1～2004.4.12	800	高松市教育委員会	2
多肥松林道跡（保井集落）	1次	1993.4.26～1994.9.6	17,600	（財）香川県埋蔵文化財調査センター	3
多肥松林道跡（高松土木）	2次	1994.10.1～1995.3.31	5,900	（財）香川県埋蔵文化財調査センター	4
多肥松林道跡（通路）	3次	1997.4.1～1997.12.31	7,000	（財）香川県埋蔵文化財調査センター	5
多肥松林道跡（高松市営野菜園）	4次	2003.12.1～2004.3.31	2,000	（財）香川県埋蔵文化財調査センター	6
多肥松林道跡（電気店）	5次	2005.11.16～2005.1.26	320	高松市教育委員会	7
日暮・松林道跡（市計画道路）	1次	1993.11.15～1995.9.29	11,600	高松市教育委員会	8
日暮・松林道跡（商店会）	2次	2002.5.12～2002.7.31	2,200	高松市教育委員会	9
日暮・松林道跡（便道）	3次	2004.5.12	70	高松市教育委員会	10
日暮・松林道跡（フィットネスクラブ）	4次	2004.12.1～2006.1.7	800	高松市教育委員会	11
日暮・松林道跡（共同住宅）	5次	2004.12.11～2004.12.13	124	高松市教育委員会	12
日暮・松林道跡（販賣ホーム）	6次	2004.6.23～2004.8.27	1,500	高松市教育委員会	13
日暮・松林道跡（事業所）	7次	2006.10.1～2006.10.12	100	高松市教育委員会	14
日暮・松林道跡（共同住宅）	8次	2006.11.20～2006.12.2	490	高松市教育委員会	15
日暮・松林道跡（フィットネスクラブ増築）	9次	2007.3.1～2007.3.27	2,892	高松市教育委員会	16
日暮・松林道跡（店舗建設）	10次	2015.12.11～2015.12.28	619	高松市教育委員会	17
日暮・松林道跡（店舗建設）	11次	2017.6.19～2017.7.7	180	高松市教育委員会	18
多肥灰瓦道跡（通路）	1次	1997.4.1～1999.9.30	12,245	（財）香川県埋蔵文化財調査センター	19
多肥灰瓦道跡（宅地造成）	2次	2004.7.5～2004.7.16	295	高松市教育委員会	20
多肥灰瓦道跡（衣料品販売店舗）	3次	2005.1.21～2005.11.25	180	高松市教育委員会	21
多肥貯糞道跡（テニスクラブ）	2017.4.24～2017.5.17	594	高松市教育委員会	22	
多肥平廻道跡（通路）	1次	2008.2.1～2008.6.30	3,068	香川県埋蔵文化財センター	23
多肥平廻道跡（道路建設）	2次	2016.6.14～2016.7.27	598	高松市教育委員会	24

既存報告書（報告書が刊行されているものについては報告書のみを記載した）

【松林道跡】

1. 高松市教育委員会 1996『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林道跡』
2. 高松市教育委員会 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 松林道跡（第2次調査）』

【多肥松林道跡】

3. (財)香川県埋蔵文化財調査センター 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1回 多肥松林道跡』
4. 香川県教育委員会 1995『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林道跡』
5. 香川県教育委員会 2016『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林道跡』香川県教育委員会
5. (財)香川県埋蔵文化財調査センター 1998『多肥松林道跡』「県道、河川開削埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度」
5. 香川県埋蔵文化財センター 2017『多肥松林道跡』「県道太田志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」
6. 香川県埋蔵文化財センター 2005『高松南警察署移転整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林道跡』「香川県埋蔵文化財センター年報 平成15年度」
7. 高松市教育委員会 2006『電器店建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥松林道跡（電器店）』

【日暮・松林道跡】

8. 高松市教育委員会 1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林道跡』
9. 高松市教育委員会 2003『香川県生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道跡（済生会）』
10. 高松市教育委員会 2005『日暮・松林道跡（農道）』『高松市内道跡発掘調査概報－平成15年度国庫補助事業－』
11. 高松市教育委員会 2005『フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道跡（フィットネスクラブ）』
12. 高松市教育委員会 2005『日暮・松林道跡（共同住宅）』『高松市内道跡発掘調査概報－平成15年度国庫補助事業－』
13. 高松市教育委員会 2005『特別養護老人ホーム（なでしこ香川）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道跡（済生会特養ホーム）』
14. 高松市教育委員会 2007『日暮・松林道跡（事務所建設）』『高松市内道跡発掘調査概報－平成18年度国庫補助事業－』
15. 高松市教育委員会 2007『日暮・松林道跡』「共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
16. 香川県教育委員会 2008『日暮・松林道跡（フィットネスクラブ増築工事）』『香川県文化財年報 平成18年度』
17. 高松市教育委員会 2016『店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道跡－第10次調査－』
18. 高松市教育委員会 2018『店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道跡（第11次調査）』

【多肥宮尻道跡】

19. 香川県教育委員会 2017『県道太田志度線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥宮尻道跡』
19. 香川県教育委員会 2018『県道太田志度線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥宮尻道跡』
20. 高松市教育委員会 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻道跡』
21. 高松市教育委員会 2006『衣料品販売店建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥宮尻道跡』
22. 高松市教育委員会 2018『テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

【多肥平塚道跡】

23. 香川県教育委員会 2013『県道太田志度線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥平塚道跡』
24. 高松市教育委員会 2017『都市計画道路朝日町弘生山線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥平塚道跡』

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

高松市立多肥小学校校舎等建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は第3図に示すとおり、工事内容にあわせて第1～4調査区を設定し、調査を行った。

第1調査区は多肥小学校新設運動場への進入道路整備の範囲である。

第2・第3調査区は多肥小学校屋外便所、それに伴う浄化槽を増設する範囲であったため、それぞれに調査区名を付与した。

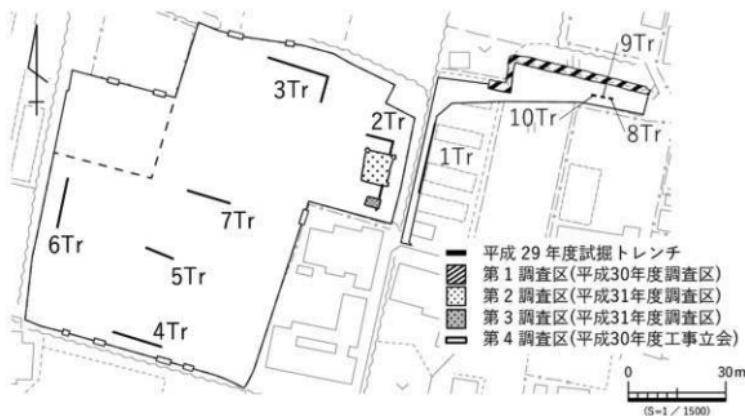
第4調査区は多肥小学校運動場の擁壁及び防球ネット設置工事に伴う工事立会である。

第4調査区にて検出した遺構は西北から東北、西南から東南へと番号を付与した。

調査時には各調査区名をそれぞれ付したが、本書を作成するにあたりすべて新たな番号を与

えて統一した。詳細は以下の表（第1表）に記した。

平成30年度及び平成31年度調査において、いずれも基本的には遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力による掘り下げを行った。また、測量に関する基準杭は、平成30年度は業者に委託して設置し、平成31年度はその一部を使用し、とグラウンド建設にあたり設置された基準杭を使用した。図面は全て調査時及び整理作業時に調査員が作成した。



第4図 松ノ内遺跡調査区配置図

第2表 調査区・遺構番号対照表

調査年度	旧調査区名	新調査区名
平成30年度免振調査	Tr1・Tr2・Tr3	→ 第1調査区
平成31年度免振調査	大調査区	→ 第2調査区
	小調査区	→ 第3調査区
平成30年度立会調査		→ 第4調査区

調査区	旧遺構番号	新遺構番号	調査区	旧遺構番号	新遺構番号	調査区	旧遺構番号	新遺構番号
第1調査区	SD2	→ SD1	第2調査区	SP1	→ SA14-P1	第4調査区	SD1	→ SD23
	SD3	→ SD2		SP2	→ SA14-P2		SD5	→ SD24
	SD4	→ SD3		SP3	→ SA14-P3		SK6	→ SK25
	SD5	→ SD4		SP23	→ SA14-P4		SK7	→ SK26
	SP7	→ SP5		SK18	→ SK15		SX2	→ SX27
	SP8	→ SP6		SP9	→ SP16		SX3	→ SX28
	SP9	→ SP7		SP8	→ SP17		SX4	→ SX29
	SP10	→ SP8		SP4	→ SP18		SX8	→ SX30
	SP11	→ SP9		SX11	→ SX19		SX9	→ SX31
	SP12	→ SP10		SX10	→ SX20		SX10	→ SX32
	SP13	→ SP11		SP25	→ SP21		噴隙	→ 噴隙
	SX1	→ SX12		SP24	→ SP22			
	SX6	→ SX13						

第2節 層序

表土層を含む調査地の堆積層については、調査区壁面の層序を記録した。土色や土質については、調査時の記録による。したがって、同一と考えられる土層について、調査区で記載の相違が認められる。

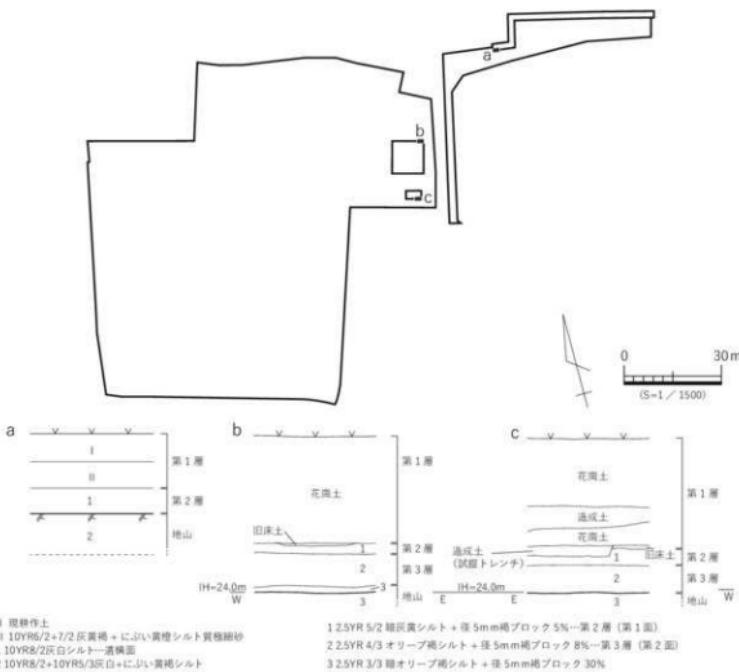
各調査区の標高は、第1調査区では標高約24.0～24.2m、第2・3調査区の第1面では標高約24.4m、第2面では24.2mである。

調査地周辺の地形が南西から北東へ向けて傾斜する状況と合致している。

本調査における層序は概ね3層に大別する事ができる。第1層は遺構面より上面にある造成土や近・現代以降の耕作土・旧耕作土、それに付随する床土であり、0.5～0.9 mの層厚を測る。

第2層は第1遺構面の基盤層であり、灰白から暗灰黄色のベースに斑状のマンガンが混ざるシルト層である。第3層は第2遺構面の基盤層であり、オリーブ褐のシルト層である。遺構が掘り込まれた層が異なることから、遺構面を2面に分けて第2層・第3層としたが、遺物に乏しい為、第2層と第3層の時期差を判別する事は困難である。

第2層は平面にて確認した際、砂礫層とシルト層が交互に検出された。これは、近隣の多肥松林遺跡（3次）や多肥平塚遺跡（香川県教育委員会2013）の報告と同様、砂礫層の合間にシルト層が堆積する為である。このことから、この一帯の特徴であると考えられる。



第5図 土層図

第3節 遺構・遺物

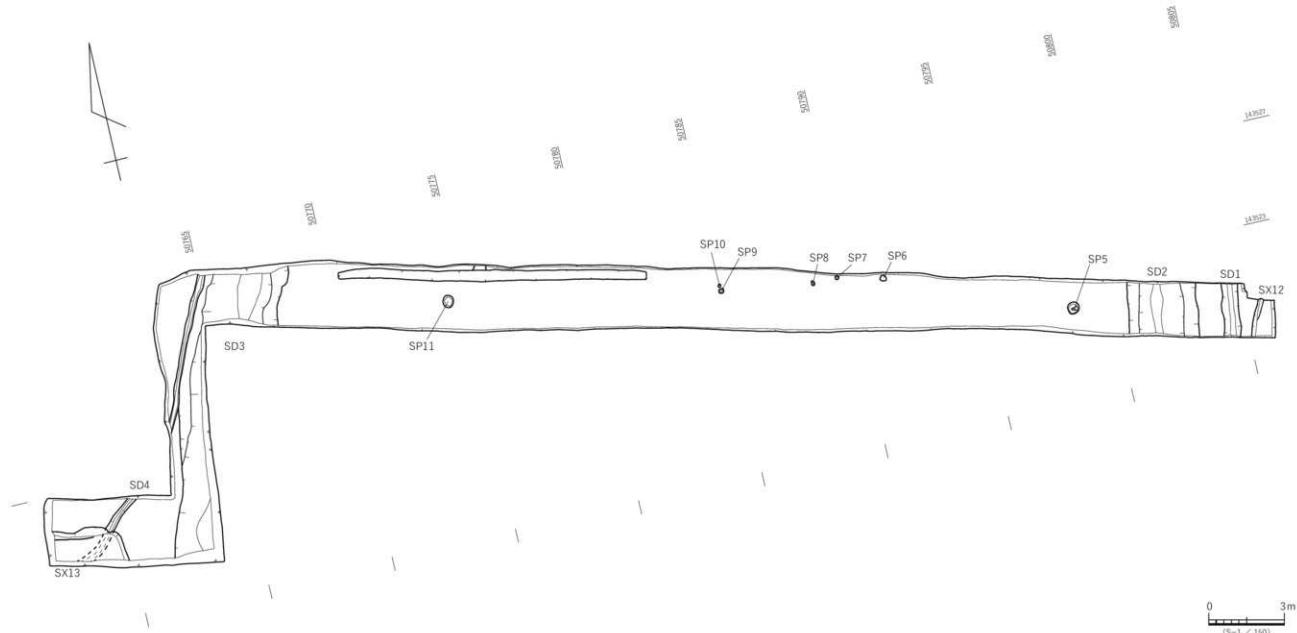
第1調査区

多肥小学校新設運動場への進入道路整備の範囲であるため、東西 45 m、南北 10 m、東西 5 m と 2 回屈折する幅 1.5 m の細長い調査区で

あった。調査時には屈折に応じてトレンチ名を

付与し、整理作業をするにあたって調査範囲を「第1調査区」と統一した。

第1調査区にて検出した遺構は全て第1遺構面に属する。



第6図 第1調査区遺構配置図 (S=1/150)

SD1（第6図）

調査区東端寄りで検出した溝である。検出長は南北に2.1m、東西幅0.7m、深さ0.2mである。

出土した遺物の中で図化したものは1である。

1は土師器小皿または壺の口縁部である。外縁は摩滅により調整を確認できず、内面はナデを認める。時代や分類は不明である。

SD2（第6図）

調査区東端寄りで検出した溝である。検出長は南北に2.1m、東西幅に2.8m、深さ0.7mである。延伸方位はN-11°-Eである。確認できる延伸幅が狭小であるため断定は難しいが、これは高松平野における条里型地割の方位に沿う可能性がある。断面観察より、ブロックが均一であり、堆積層が平坦なことから人為的な埋め戻しは認められないと判断した。

出土した遺物の中で図化したものは2～22である。

2、3は土師器小皿、4～18は土師器壺、19～21は土師器足釜、22は須恵器鉢である。

2は土師器小皿である。口径約8.5cm、底径約6.8cm、器高約0.9cmである。内外面ともにナデ痕が認められ、底部切り離し技法はヘラ切りである。時代や分類は不明である。3は皿B I-1に該当する土師器小皿(佐藤2000)である。口径約9.6cm、底径約7.0cm、器高約1.4cmである。内面にナデと指頭圧痕、外面にナデ、底部に右回転ヘラ切りを認める。外傾が強く、長い口縁部を持つ。年代は11世紀中葉から11世紀第3四半期と推定される。

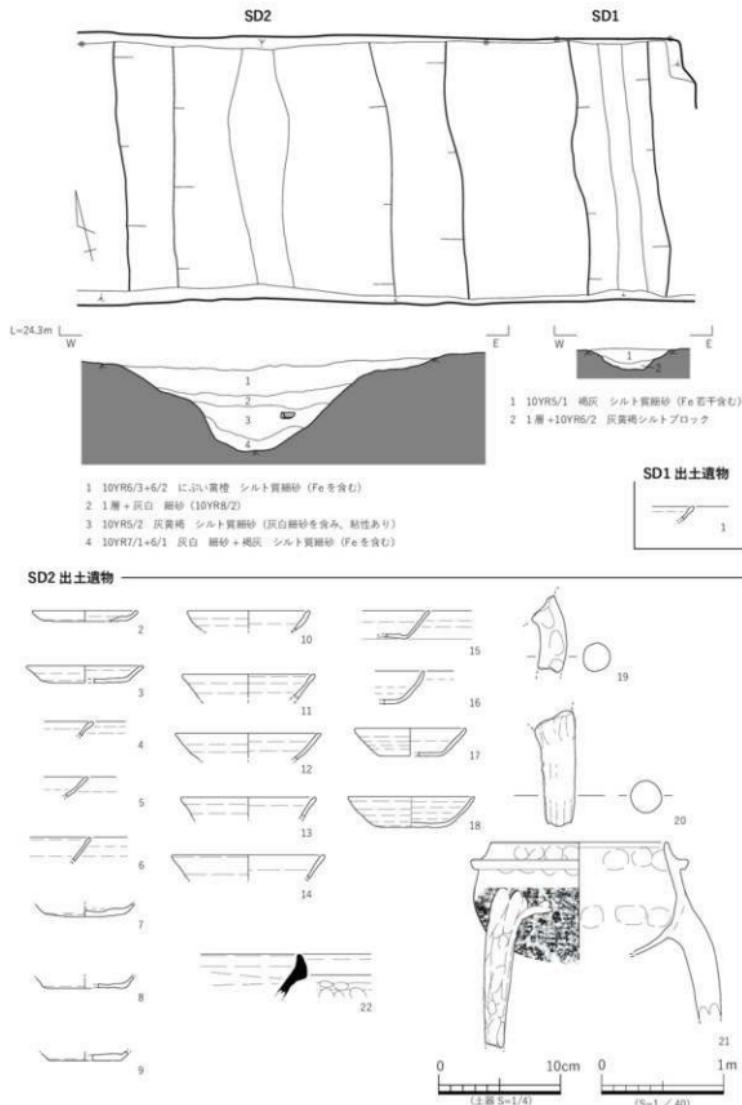
4は土師器壺の口縁部である。内外面ともに回転ナデが認められる。時代や分類は不明である。5は土師器壺の口縁部である。内外面ともに回転ナデを認める。時代や分類は不明である。6は土師器壺の口縁部である。内外面ともにナデを認める。時代や分類は不明である。

7は土師器壺の底部である。底径約6.8cmである。内外面ともに回転ナデが認められる。底部切り離し技法は左回転ヘラ切りである。板状圧痕が認められることから、底部切り離し後、

板の上に置いていたと考えられる。時期や分類は不明である。8は土師器壺の底部である。底径約6.4cmである。内面にナデ、外面に回転ナデが認められ、底部切り離し技法は底部摩滅により不明である。時期や分類は不明である。9は土師器壺の底部である。底径約6.0cmである。内外面ともに回転ナデが認められる。底部切り離し技法は回転糸切りであり、切り離し後に左回転のナデが認められる。時期や、分類は不明である。

10は土師器壺の口縁部から体部である。口径約10.0cmである。内外面ともに回転ナデを認める。時期や分類は不明である。11は土師器壺の口縁部から体部である。口径約11.0cmである。摩滅により、調整を確認できなかった。時期や分類は不明である。12は土師器壺の口縁部から体部である。口径約12.0cmである。内外面ともに回転ナデを認める。時期や分類は不明である。13は土師器壺の口縁部から体部である。口径約11.2cmである。内外面ともに回転ナデを認める。時期や分類は不明である。14は土師器壺の口縁部から体部である。口径約12.6cmである。内外面ともに回転ナデを認める。底部切り離し技法や時期、分類は不明である。

15は土師器壺の口縁部から底部である。器高約2.3cmである。内外面ともに右回転ナデ、底部に板状圧痕を認める。板状圧痕は、内面に当て具痕がないことから板の上に置いた際についたものと考えられる。時期や分類は不明である。16は土師器壺の口縁部から底部である。器高約2.7cmである。調整は摩滅により確認できなかった。底部切り離し技法や時期、分類は不明である。17は土師器壺の口縁部から底部である。口径約9.2cm、底径約5.4cm、器高約2.3cmである。内外面ともに回転ナデを認め、底部内面に指頭圧痕、底部外面に板状圧痕が認められるが、底部内面に当て具痕がないことから板の上に置いた際についたものと考えられる。底部切り離し技法や時期、分類は不明である。18は土師器壺の口縁部から底部である。口径約10.4cm、底径約5.0cm、器高約2.6cmである。



第7図 SD1,2 平・断面図と出土遺物

標高 23.61m 地点より出土した。これは SD2 の第 3 層にある。摩滅により調整は確認できなかつた。底部切り離し技法や時期、分類は不明である。

19、20 は足金の脚部である。20 は 21 と同一地点にて確認したが、同一個体ではないと判断した。21 は足金 B II に該当する足金（佐藤 1995）である。口径約 14.4cm、底径約 17.4cm である。口縁部内面と底部内面、鍔部の上下に指頭圧痕、底部にのみ格子状の叩き目が認められる。鍔部から底部にかけ煤の付着を確認した。年代は 14 世紀前葉と推定される。

22 は B3-II 類に該当する須恵器の手捏鉢（中世土器研究会事務局 2015）である。口縁端部下方で重ね焼き痕と色調の異なりが認められる。確認できる製作技法としては、口縁端部下部には指頭圧痕、内面に工具を使用した回転ナデの痕がある。口縁端部の上下が拡張されていること、口縁外面の下端が外方へせり出していることから、年代は 12 世紀末～13 世紀初頭と推定される。

埋土は 4 層に分層した。第 3 層では粘性のある土を確認したほか、14 世紀前葉の遺物を確認したことから、第 3 層が形成されるまでに緩やかな堆積時期を経たことが考えられる。

第 2 層に第 1 層の埋土が含まれていることから、第 1・2 層はほぼ同時期に埋没した層であると考えられる。

年代を推定できる遺物より、この溝は 11 世紀中葉頃には機能しており、それ以後 14 世紀前葉頃まで緩やかに埋没していたが、のちに何かしらの理由で短期間で埋まつたと考えられる。

SD3（第 8・9 図）

調査区西で検出した大規模な溝である。溝の北側では肩を全て検出できたが、南側は西側の肩のみの検出である。検出長は南北に 11.1 m、東西幅 3.0 m、深さ 0.8 m である。SD3 は第 1 調査区内で最も方位の確実な溝であるが、方位は N-23° -E と条里型地割に沿わない。

断面観察より人為的な埋め戻しは認められないが、礫の埋没の仕方から、埋没していく過程で何かしらの理由で礫が投げ込まれたことが考えられる。

検出長が長いことから、北側上層・北側下層・南側と分けて遺物を取り上げた。上層・下層としたが、のちに記述する層序とは関連させていない。

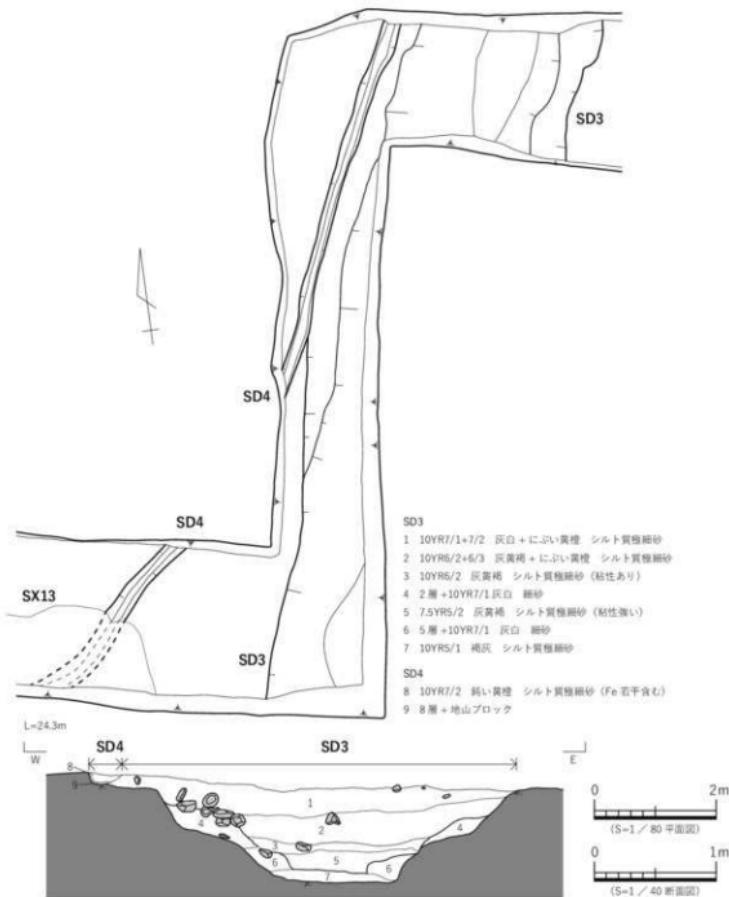
出土した遺物の中で図化したものは 23～38 である。北側上層は 23～27、北側下層は 28～30、南側は 31～38 である。

23 は鍋 A II に該当する土師器鍋（佐藤 1995）の口縁部である。内外面ともに指押さえ、口縁端部にナデを認める。年代は 13 世紀中頃から 14 世紀前半と推定される。24 は土師器把手付鍋の口縁部である。内外面ともにナデ、把手部に指頭圧痕を認める。口縁部に外面から内面向かって孔があるが、大きく欠損している為、判別が難しい。25 は足金 B II 類に該当する土師器足金（佐藤 1995）の口縁部である。口縁端部外面に回転ナデ、鍔部に指押さえの痕を認める。年代は 14 世紀前期である。

26 は瓦器椀の底部である。底径約 6.8cm である。内面に磨き、外面に回転ナデ、底部にナデが認められる。底部に輪高台が貼付される。体部の残存に乏しいため、年代を推定することは難しい。

27 は須恵器の皿または杯である。内外面ともに回転ナデのほか、内面には火燐、外面に重ね焼き痕が認められる。時期や分類は不明である。

28 は皿 B III-3 に該当する土師器小皿（佐藤 1995）である。口径約 6.0cm、底径約 5.0cm、器高約 0.96cm である。内面にナデ、外面に回転ナデ、底部から体部にかけわざかに摩滅が認められる。底部切り離し技法はヘラ切りである。年代は 12 世紀中頃から 12 世紀末までと推定される。29 は足金 B III 類に該当する土師器足金（佐藤 1995）の口縁部である。鍔部上部から内面にかけナデが見られ、下部では指押さえが認められる。年代は 14 世紀中葉から 14 世紀後葉頃である。

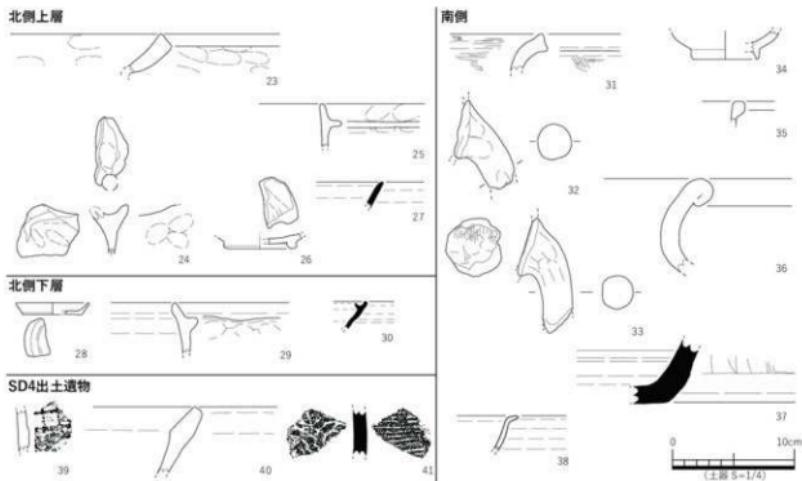


第8図 SD3,4 平・断面図

30は环日身に該当する須恵器环身（西1986）である。内外面ともに回転ナデを認め、かえりは受け部とほぼ同じ高さであり、器壁は薄い。年代は7世紀中葉から670年頃までと推定される。

31は土師器窯の口縁部である。口縁端部はやや肥厚して窪み、上下につまみ上げられたよ

うな形状をしている。内面に横ハケ、外面の口縁部棱線以下に縦ハケが認められる。口縁部の外反する屈曲は弱いと考えられる。亀山焼窯のような特徴をもつと考えられるが、口頭部のみの残存であり、体部への格子叩き等を認めることができないことから可能性を示唆するに留め



第9図 SD3,4 出土遺物

る。時期、分類は不明である。32、33は足金の脚部である。時期や分類は不明である。

34は肥前系陶器碗の底部である。内外面ともに回転ナデを施し、底部を含めた全てに施釉後、高台の地面と接する部分をナデにて釉を剥いだような痕が認められる。高台は削り出しにて作られている。胎土と焼成のほか、内面に三島手の文様が認められることから年代は近世頃と推定される。

35は唐津焼に該当する陶器鉢の口縁部である。内面は摩滅しており、外面と端部に回転ナデ、内外面ともに薄く施釉が認められるが、端部には摩滅のためか釉は認められない。唐津焼であることから年代は近世頃と推定される。

36は備前焼に該当する陶器甕の口縁部である。内外面ともに回転ナデが認められる。口縁は折り曲げ成形である。時期、分類は不明である。37は備前焼に該当する陶器甕の底部である。底部に草か藁を敷いて作成したと思われる痕、体部に縱方向の板ナデの痕が認められる。時期、分類は不明である。

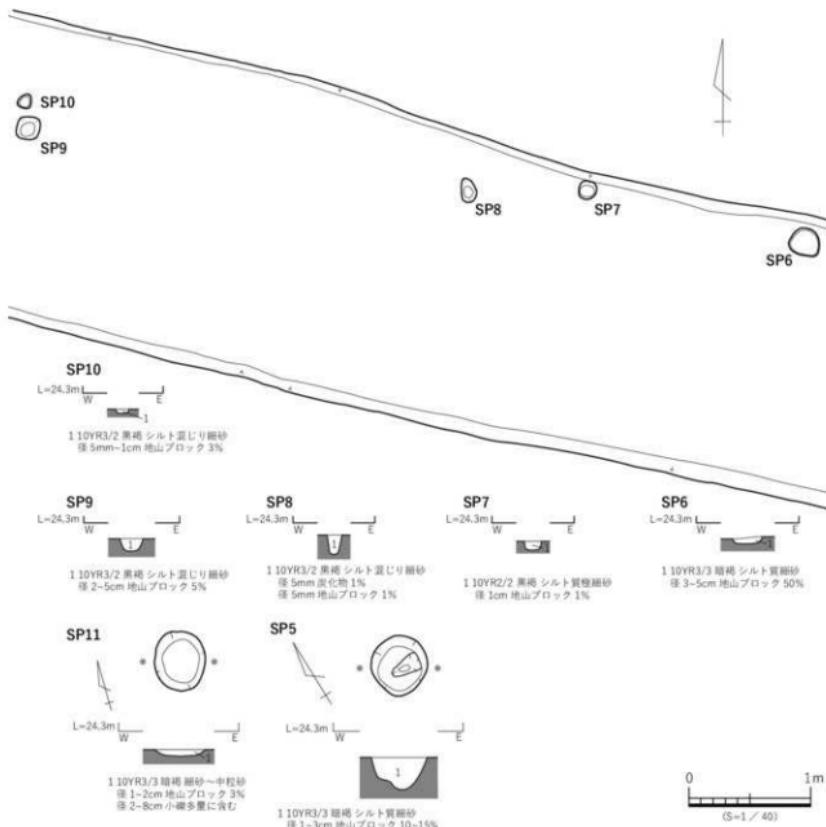
38は青磁碗の口縁部である。内外面ともにオリーブ灰の施釉を認める。時期や分類は不明である。

埋土は7層に分層した。断面にて確認できる疊の土層堆積状況から、第7・6・4層が形成された時期とそれ以後の時期と、大きく2時期に分けられる。第7・6・4層が堆積した後、再掘削されて、新たに第5・3・2・1層が堆積する。断面状況から、再掘削が行われた段階で西岸に疊が置かれた可能性がある。

この溝から出土した遺物は7世紀中葉から近世頃と推定される。7世紀頃と推定した30以降の時期である8～11世紀頃と推定される遺物が確認できなかったことから30は再掘削の際に混入したこととも考えられる。主体を占める遺物の年代から、12世紀頃～14世紀頃と長く利用され、最終利用または最終埋没時期は近世であることが想定される。

SD4（第8・9図）

調査区西で検出した溝である。検出長は南北



第10図 SP5~11 平・断面図

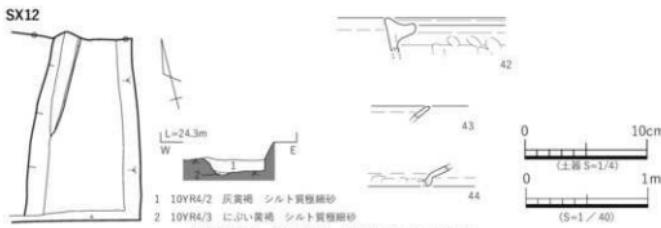
に 6.0 m、東西幅 0.4 m、深さ 0.1 m である溝状遺構である。

SD3 と SX13 を切る。SD4 は南壁断面の観察より SX13 を切りながら西へ屈曲し延びていくことが窺える。

出土した遺物の中で固化したものは 39 ~ 41 である。

39 は土師器の土器片である。内面にナデ、外

面に格子叩きが認められる。格子叩きが見られることと弯曲が少ないとから、足釜または鍋の底部であると考えられる。時期、分類は不明である。40 は土師器土鍋の口縁部である。口縁端面は器壁に直交し、口縁部の内湾は弱い。口縁部にナデを行った後に板ナデが行われたと思われる痕が、体部には口縁部に向けて横方向の板ナデを行った痕が認められる。時期、分類は



第11図 SX12 平・断面図と出土遺物

不明である。

41は須恵器である。外面に横方向の叩き目、内面に青海波紋の当て具痕が見られる。時期、分類は不明である。

出土遺物より年代を推定することができなかつたが、SD3を切ることから、時期はSD3の埋没以降に形成されたといえる。

SP5（第10図）

調査区中央で検出した遺構である。南北に0.5m、東西に0.5m、深さ0.3mである。

遺物は出土しなかつた為、形成された時期は不明である。

SP6（第10図）

調査区中央で検出した遺構である。南北に0.2m、東西に0.3m、深さ0.05mである。

遺物は出土しなかつた為、形成された時期は不明である。

SP7（第10図）

調査区中央で検出した遺構である。南北に0.2m、東西に0.2m、深さ0.06mである。

遺物は出土しなかつた為、形成された時期は不明である。

SP8（第10図）

調査区中央で検出した遺構である。南北に0.2m、東西に0.1m、深さ0.2mである。

遺物は出土しなかつた為、形成された時期は不明である。

SP9（第10図）

調査区中央で検出した遺構である。南北に0.2m、東西に0.2m、深さ0.1mである。

遺物は細片が出土し、団化には至らなかつた。

SP10（第10図）

調査区中央で検出した遺構である。南北に0.1m、東西に0.1m、深さ0.03mである。

遺物は細片が出土したが、団化には至らなかつた。

SP11（第10図）

調査区中央で検出した遺構である。南北に0.5m、東西に0.5m、深さ0.07mである。

遺物は出土しなかつた為、形成された時期は不明である。

SP5～SP11の関連性を推定することはできなかつた。

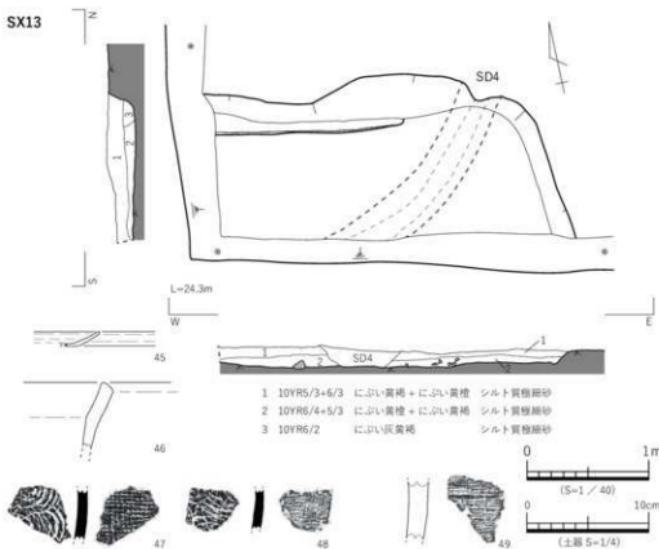
SX12（第11図）

調査区最東端で検出した性格不明遺構である。検出長は南北に1.4m、東西に0.9m、深さ0.1mである。北、南、東の三方面が調査区外に広がるため、正確な形は不明である。

狹小な範囲での掘削であったため断定はできないが、壁溝と思われる掘り込みを確認したほか、断面形状より底面が平坦であることが確認できることから、竪穴建物跡の可能性を考えたい。

出土した遺物の中で団化したものは42～44である。

42は土師質土釜CI-②に該当する土師質土



第12図 SX13 平・断面図と出土遺物

釜（香川県教育委員会 1992）の口縁部である。鋸部に接合とともになう指頭圧痕を認める。年代は10世紀前半から10世紀末と推定される。43は土師器小皿または環の口縁部である。内面の調整は摩滅により確認できず、外側は回転ナデが認められる。時代や分類は不明である。44は土師器環の底部である。底部内面に指頭圧痕が認められる。

出土遺物より10世紀頃の遺構であると考えられる。

SX13 (第12図)

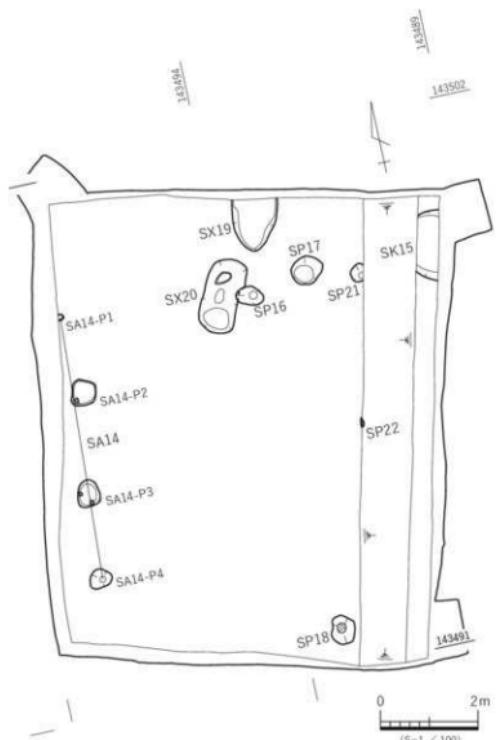
調査区最南西で検出した竪穴建物跡である。平面検出時に確認する事ができなかったが、断面観察により壁溝と思われる溝が確認できたこと、遺構底面が平坦であることから竪穴建物跡の可能性があると考えられる。検出長は南北に1.4 m、東西に3.0 m、深さ1.0 mである。

出土した遺物の中で図化したものは45～49である。

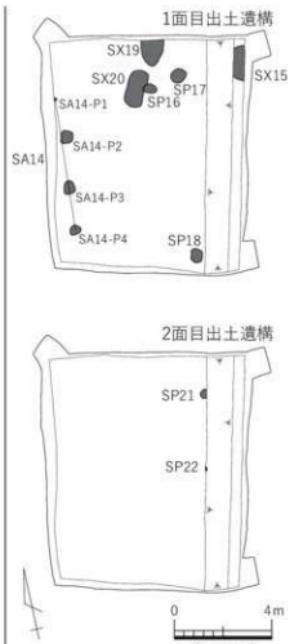
45は土師器小皿である。器高約1.2cmである。内外面ともにナデを認め、底部切り離し技法は底部摩滅により不明である。時期、分類は不明である。46は鍋B II類に該当する土師器鍋（佐藤 1995）の口縁部である。口縁端部に回転ナデ、体部内外面ともにナデのちに板ナデ、頭部に指頭圧痕を認める。口縁端面は器壁に直交し、口縁部の内湾は弱い。年代は14世紀中葉から後葉と推定される。本遺構を切り込むSD4からの混入と考えられる。

47、48は須恵器の土器片である。47は工具に使用した木の板目に直交して作られた工具を使用した格子のような叩き目が外面に見られる。叩き目の方向は横である。内面には青海波紋の當て具痕の痕とその上からナデを施した痕が見られる。48は格子状の叩き目が外面に見られ、内面は青海波紋の當て具痕が見られる。いずれも時期、分類は不明である。

49は備前焼の陶器片である。工具に使用した木の板目に沿って作られた工具を使用した横方



第14図 第2調査区遺構配置図



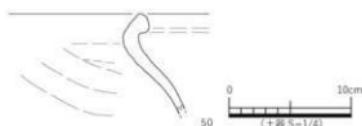
第15図 第2調査区第1遺構面、第2遺構面検出遺構

向の叩き目が外面に見られ、内面にはナデと青海波紋と思われる當て具痕が一部見られる。

包含層（遺物のみ第13図）

上記のほか、SD2よりも西側の包含層にて50が出土した。

50は甕A Iに該当する土師器甕（佐藤 1995）



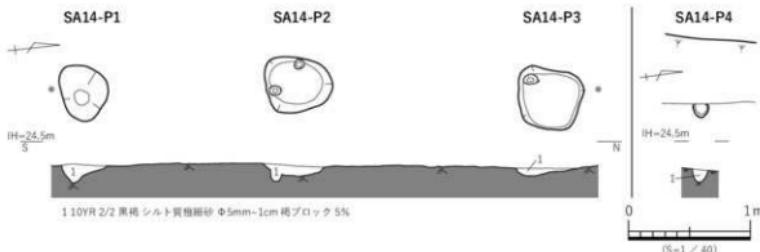
第13図 第1調査区包含層出土品

の口縁部である。断面では確認できなかったが、口縁端部内外面ともに接合痕、端部内面には接合時につけたと思われる指頭圧痕、体部内面には工具を使用してナデを行った痕が認められる。年代は14世紀中葉から後葉と推定される。

第2調査区（平成31年度調査）

調査にあたり、便所工事箇所に「大調査区」、浄化槽工事箇所に「小調査区」とそれぞれに調査区名を付与した。報告書作成にあたり、大調査区に「第2調査区」、小調査区に「第3調査区」と改めて調査区名を付与した。

調査の結果、第3調査区では遺構・遺物とも



第 16 図 第 2 調査区 SA14 平・断面図

に確認できなかったため、第 2 調査区の調査結果を記す。

第 1 遺構面

SA14 (第 16 図)

調査区西側で検出した SA14-P1 から P4 にて一列を成すピット列である。今回の調査では一直線上に並ぶ様子を確認した。東側では検出できなかったため、今後の調査にて北側や西側へ展開する可能性がある。現段階では、検出した範囲が狭いため、柵列または掘立柱建物跡か判断することはできない。今回の調査で点顔を確認できなかったため、本報告書では仮に柵列とした。

SP14-P1 (第 16 図)

調査区西側で検出した遺構である。東西に 0.5 m、南北に 0.4 m、深さ 0.2 m である。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SA14-P2 (第 16 図)

調査区西側で検出した遺構である。南北に 0.6 m、東西に 0.5 m、深さ 0.2 m である。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SA14-P3 (第 16 図)

調査区西側で検出した遺構である。南北に 0.5 m、東西に 0.5 m、深さ 0.1 m である。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SA14-P4 (第 16 図)

調査区中央で検出した遺構である。検出長は南北に 0.1 m、東西に 0.1 m、深さ 0.1 m である。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SK15 (第 17 図)

調査区東側で検出した遺構である。検出長は南北に 0.7 m、東西に 0.3 m、深さ 0.3 m である。

断面観察より、遺構面の土と同様の土がブロック状かつ不整形に見られることから、人為的に埋められた遺構である。遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

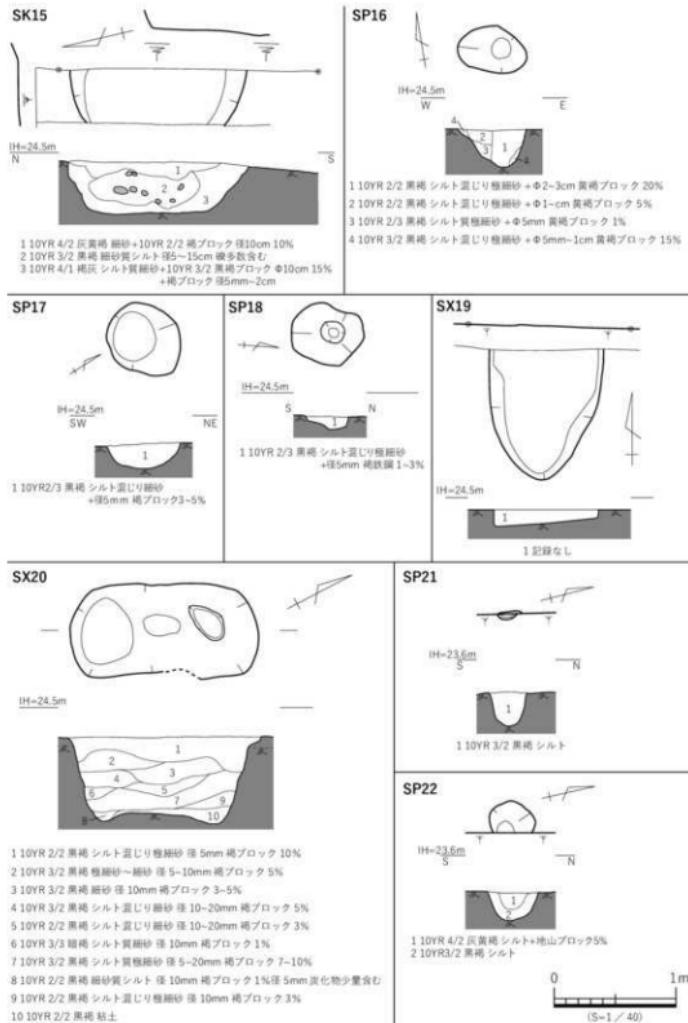
SP16 (第 17 図)

調査区中央で検出した遺構である。南北に 0.6 m、東西に 0.4 m、深さ 0.3 m である。SX21 を切る遺構である。

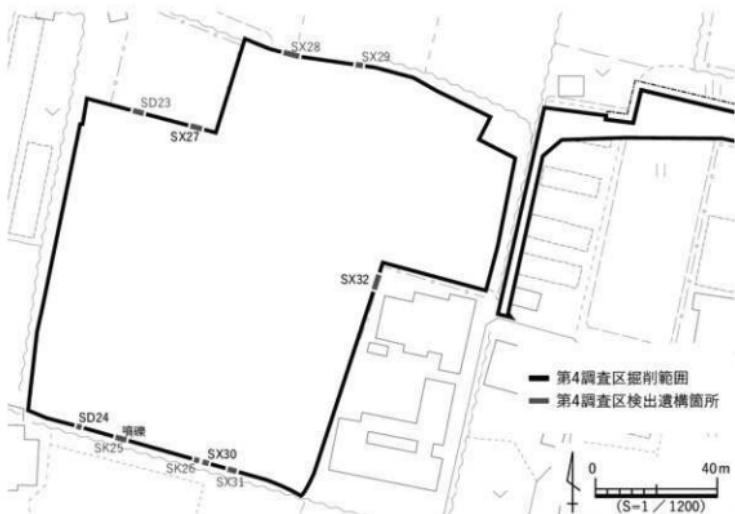
遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SP17 (第 17 図)

調査区北側中央で検出した遺構である。東西に 0.7 m、南北に 0.6 m、深さ 0.2 m である。



第17図 第2調査区 SP17-25 平・断面図



第18図 第4調査区遺構配置図

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SP18（第17図）

調査区東側で検出した遺構である。南北に0.6m、東西に0.5m、深さ0.1mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SX19（第17図）

調査区中央北壁で検出した遺構である。南北に1.1m、東西に1.0m、深さ0.7mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SX20（第17図）

調査区中央で検出した遺構である。検出長は南北に1.6m、東西に0.8m、深さ0.7mである。SP20に切られる遺構である。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

第2遺構面

SP21（第17図）

調査区中央で検出した遺構である。検出長は南北に0.4m、東西に0.3m、深さ0.2mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SP22（第17図）

調査区中央で検出した遺構である。検出長は南北に0.2m、東西に0.1m、深さ0.3mである。

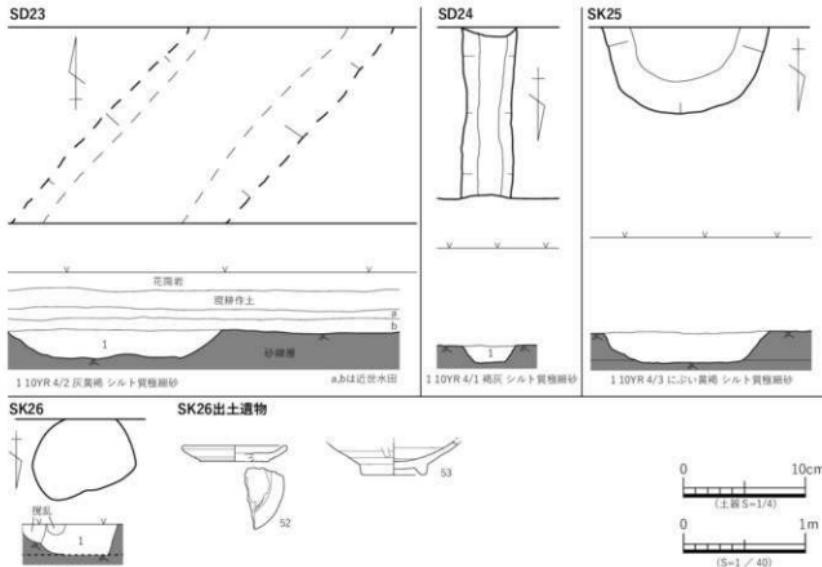
遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

黒色土（遺物のみ第19図）

第2遺構面を検出し中、第1面の遺構の埋土の最上層と同様の土が調査区北側の一部の微低地



第19図 黒色土中出土遺物



第20図 SD23,24,SK25,26 平・断面図とSK26 出土遺物

に溜まった状態で検出された土である。遺物は1点のみ出土した。51は土師器の把手付鍋である。口縁端部にナデを認める。口縁部は内湾しており、端部は丸みを帯びている。時期、分類は不明である。

第4調査区（平成30年度工事立会）

擁壁及び防球ネット設置工事のために、運動場を全周する全長約396.5m、掘削幅1mほどとのトレンチと、全長約24.7m、掘削幅1mほど、間に第1調査区を含むトレンチの2箇所が対象である。

掘削幅が1mであることから、遺構の一部のみの検出である。

SD23（第20図）

第4調査区北西で検出した遺構である。検出

長2.0m、幅1.4m、深さ0.3mである。平面にて確認する事ができず、トレンチの南北とも断面により確認ができた遺構である。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SD24（第20図）

第4調査区南西で検出した遺構である。検出長1.4m、幅0.4m、深さ0.2mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SK25（第20図）

第4調査区南西で検出した遺構である。検出長1.4m、南北に0.7m、深さ0.3mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SX26（第20図）

第4調査区南側中央で検出した遺構である。検出長は東西0.9m、南北0.7m、深さ0.3mである。

出土した遺物は52、53である。52は皿B III-2に該当する土師器小皿（佐藤2000）である。口径8.5cm、底径5.6cm、器高1.3cmである。口縁部は厚く、短く、底部に回転方向不明であるが、ヘラ切りの痕を認める。年代は11世紀第4四半期から13世紀第3四半期と推定される。53は椀II類C期に該当する白磁椀（宮崎・山本2000）の底部である。底径5.2cmである。内外面ともに回転ナデを認める。内面に淡黄色の釉と貫入、外面上部より垂れた灰白色の釉が認められる以外、外面上部は認められない。体部は内湾しており、丸みを帯びている。体部外面下部にはヘラ削りの痕が認められる。高台部外表面は直に、内面は斜めに削る痕が認められる。年代は11世紀後半から12世紀前半と推定される。

断面観察及び出土遺物より、11世紀後半から13世紀第3四半期のいずれかの時期にまとまって埋められたと推定される。

SX27（第21図）

第4調査区北西で検出した遺構である。東西3.6m、深さ0.2mである。北壁断面でのみ確認ができた遺構である。断面底部が平らに整えられていることや、遺構の立ち上がりが直角に近いことから竪穴建物跡の可能性があると考えられる。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SX28（第21図）

第4調査区北側中央で検出した遺構である。東西2.7m、南北0.5m、深さ0.2mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SX29（第21図）

第4調査区北側中央で検出した遺構である。南北1.6m、南北1.0mである。掘削工事が遺構面直上であったため、未掘削のまま平面記録を取り、終了した。

SX30（第21図）

第4調査区北側中央で検出した遺構である。検出長は東西1.0m、南北0.4m、深さ0.3mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SX31（第21図）

第4調査区南東側トレーンチ北壁断面で検出した遺構である。南北3.4m、深さ0.4mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

SX32（第21図）

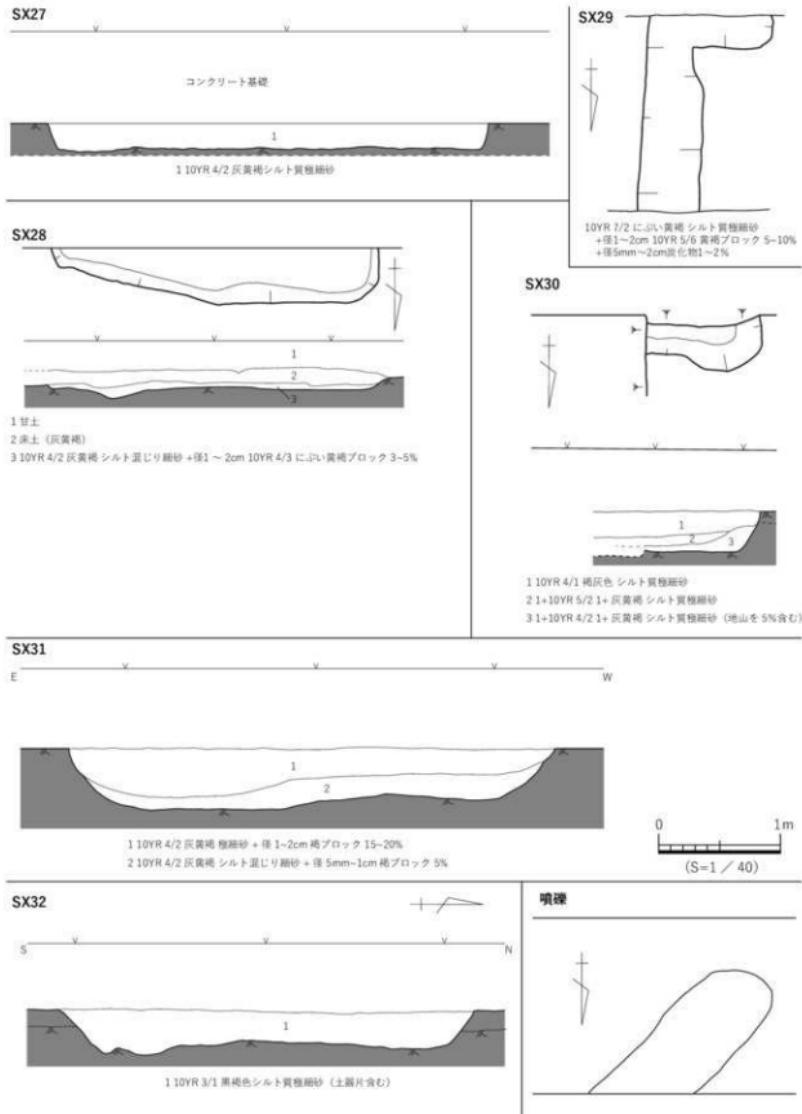
第4調査区東側トレーンチ西壁断面でのみ検出した遺構である。南北3.4m、深さ0.4mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。

噴礫（第21図）

第4調査区南西で検出した遺構である。東南1.4m、北西0.6mである。

遺物は出土しなかった為、形成された時期は不明である。



第 21 図 SX27~32, 噴礫

第4章 総括

第1節 調査成果について

本調査の結果

今回の調査では、掘削幅が1m前後の調査区が多いほか、出土した遺物のうち、時期を推定できるものが少ないため、遺構の時期や性格が不明なものが多い。

検出した遺構は柵列または掘立柱建物跡と考えられる遺構1基、溝6条、土坑3基、柱穴12基、正確不明遺構10基、噴礫1箇所を検出した。

出土遺物の年代は7世紀から近世である。

第1調査区では、竪穴建物跡の可能性のある不明遺構を2基、南北方向に延伸する溝を4条、ピットを7基を確認した。出土した遺物から11世紀から14世紀に埋没したと考えられる。

調査を通して検出した溝のうち、いくつかは高松平野における条里型地割に沿う可能性が想定される。

高松平野における条里型地割の方位に沿う可能性のある溝は第1調査区にて検出したSD3である。方位はN-11° -Eであり、高松市における条里型地割の方位であるN-9~11° -Eに合致する。しかし、南北方向の掘削範囲が狭小であるため確定的方位であるとはいえない。

その一方、最も方位の確定的なSD4の方位はN-23° -Eであり、高松平野における条里型地割に合致しない。

第2調査区では、第1遺構面にてピットを7基、性格不明遺構を3基検出した。第2遺構面ではピットを2基検出した。遺構から出土した遺物は細片が多く、時期を判別することが難しい。

第4調査区では、南北方向に延伸する溝を2条、性格不明遺構を6基、土坑を2基、噴礫を1基検出した。出土遺物を確認できた遺構はSK32のみであり、出土した遺物のうち時期が判別できるものは11世紀から13世紀頃と推定できる2点のみである。

概ね11世紀から14世紀の中世頃の遺構・遺物を検出している。このことから、本調査における松ノ内遺跡は11世紀から14世紀頃の遺跡であると考えられる。

第1調査区は全長約50mほどであり、SD3とSD4は近接しており、現状では条里型地割として認めがたい。第2調査区、第4調査区と西側の調査でも条里型地割に合致する溝は確認できなかった。よって、当該地では条里型地割の施行が他の地域よりも遅れる可能性が想定できる。その要因として地形環境が大きく影響しているものと考えられる。

まとめ

松ノ内遺跡より東に位置する松林遺跡、多肥松林遺跡、多肥宮尻遺跡では、弥生時代から古代を中心とした遺構が多く確認されている。中世に入ると小規模な居住域や、和泉産瓦器の大量の出土から消費地への中繼所を想定できる物流の様子が確認される。西に位置する多肥平塚遺跡や多肥北原遺跡では古代から中世の遺構が確認されており、徐々に展開していく様子が窺える。

松ノ内遺跡も同様に、出土遺物から古代から中世の遺構を確認した。SD4にて再掘削が想定される埋土の状況及び近世の土器も確認していることから、長く利用された遺跡であったことが窺える。

今回の調査にて多数の溝を確認したが、いずれも周辺の遺跡の中でも最も近隣にある多肥平塚遺跡にて同時期かつ同規模の遺構は確認できなかった。

第1調査区にて確認したSD4の再掘削が行われ、長い年月の利用が窺えることから、今後の調査により詳細に利用状況が明らかになることを期待する。

参考文献

第2章

- 高松市教育委員会 1996『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』
高松市教育委員会 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 松林遺跡(第2次調査)』
(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』
香川県教育委員会 1995『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』
香川県教育委員会 2016『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1998『多肥松林遺跡』『県道・河川開削埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』
香川県教育委員会 2017『多肥松林遺跡』『県道太田志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
高松市教育委員会 1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡』
高松市教育委員会 2018『店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡(第11次調査)』

第3章 第2節 参考文献

- 香川県埋蔵文化財センター 2017『多肥松林遺跡』『県道太田志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
香川県教育委員会 2013『県道太田志度線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥平塚遺跡』

第3章 第3節 参考文献

- (財)香川県埋蔵文化財センター 1995『圓分寺舎井遺跡』
中世土器研究会事務局 2015『東播系須恵器鉢の分類と編年』『中近世土器の基礎研究 26』日本中世土器研究会
奈良文化財研究所・歴史土器研究会 2019『飛鳥時代の土器編年再考』
高松市教育委員会 2005『日暮・松林遺跡』
中世土器研究会 1995『瓦器鉢』『概説 中世の土器・陶磁器』
大宰府市教育委員会 2000『大宰府糸坊跡 XV』
(財)香川県埋蔵文化財センター 1992『川津元結木遺跡』

第4章 第1節 参考文献

- 高松市教育委員会 1996『香川県立高松桜井高校周辺通字路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林道路』
- 高松市教育委員会 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 松林道路(第2次調査)』
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1回 多肥松林道路』
- 香川県教育委員会 1995『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林道路』
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター 1998『多肥松林道路』『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』
- 香川県埋蔵文化財センター 2005『高松南警察署移転整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林道路』『香川県埋蔵文化財センター年報 平成15年度』
- 高松市教育委員会 1997『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林道路』
- 高松市教育委員会 2003『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道路(済生会)』
- 高松市教育委員会 2005『日暮・松林道路(県道)』『高松市内道路発掘調査概報 -平成15年度国庫補助事業-』
- 高松市教育委員会 2005『特別養護老人ホーム(なでしこ香川)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道路(済生会特養ホーム)』
- 高松市教育委員会 2005『フィットネスクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道路(フィットネスクラブ)』
- 高松市教育委員会 2005『日暮・松林道路(共同住宅)』『高松市内道路発掘調査概報 -平成15年度国庫補助事業-』
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター 1998『多肥宮尻道路』『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター 1999『多肥宮尻道路』『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター 2000『多肥宮尻道路』『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』
- 香川県教育委員会 2018『県道太田志度線道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥宮尻道路』
- 高松市教育委員会 2004『宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻道路』
- 高松市教育委員会 2006『衣料品販売店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥宮尻道路』

第3表 遺物観察表1～28

番号	材質	形状	寸法	重量(g)	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法
1 1.0	骨質	小豆型	(1.1) 口縫部	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
2 2.0	土器	中壺	(口縫部～底)	9.6	7.0	1.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
3 3.0	土器	小壺	(口縫部～底)	9.6	7.0	1.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
4 4.0	土器	外	(口縫部～底)	—	—	—	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
5 5.0	土器	井	(口縫部～底)	—	—	—	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
6 6.0	土器	井	(口縫部～底)	—	—	—	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
7 7.0	井	井	—	—	6.6	6.1	1.1	内底ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
8 8.0	土器	井	井	—	—	6.6	6.1	1.0	内底ナメ	ナメ								
9 9.0	土器	井	井	—	—	6.6	6.0	1.0	内底ナメ	ナメ								
10 10.0	土器	井	井	—	—	10.0	—	1.1	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
11 11.0	土器	井	井	—	—	11.0	—	2.1	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
12 12.0	土器	井	井	—	—	12.0	—	2.1	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
13 13.0	土器	井	井	—	—	11.2	—	2.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
14 14.0	土器	井	井	—	—	12.5	—	2.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
15 15.0	土器	井	井	—	—	—	—	2.3	6.0	ナメ								
16 16.0	土器	井	井	—	—	—	—	2.7	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
17 17.0	土器	井	井	—	—	9.2	5.4	2.3	内底ナメ	ナメ								
18 18.0	土器	井	井	—	—	10.4	5.0	2.6	内底ナメ	ナメ								
19 19.0	土器	井	井	—	—	5.9	—	—	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
20 20.0	土器	井	井	—	—	—	—	—	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
21 21.0	土器	井	井	—	—	12.4	10.8	1.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
22 22.0	漆器	漆	漆	—	—	—	—	—	内底ナメ	ナメ								
23 23.0	漆器	漆	漆	—	—	—	—	—	内底ナメ	ナメ								
24 24.0	漆器	漆子付鏡	漆子付鏡	—	—	—	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
25 25.0	漆器	漆	漆	—	—	—	—	—	内底ナメ	ナメ								
26 26.0	漆器	漆	漆	—	—	—	—	—	内底ナメ	ナメ								
27 27.0	漆器	漆子付鏡	漆子付鏡	—	—	6.0	5.0	0.96	内底ナメ	ナメ								
28 28.0	土器	小壺	小壺	—	—	—	—	—	内底ナメ	ナメ								

第4表 遺物觀察表 29~53



第1調査区トレンチ北側完掘（東から）



第1調査区トレンチ北側完掘（西から）



第1調査区トレンチ北側完掘（北から）



第1調査区トレンチ南側完掘（東から）



SD1,SX12 完掘状況（南から）



SD1 断面（南から）



SX12 断面（南から）



SX12 完掘状況（東から）



SD2 断面（南から）



SD2 完掘状況（南から）



SD2 完掘状況（西から）



遺物出土状況（18）



遺物出土状況（21）



SD3,4 断面（南から）



SD3 完掘状況（北東から）



SD3 完掘状況（西から）



SD4 完掘状況（南から）



SD4 完掘状況（北から）



SP5 断面（南から）



SP6 断面（南から）



SP7 断面（南から）



SP8 断面（南から）



SP9,SP10 断面（南から）



SP11 断面（南から）



SX13 完掘状況（北から）



第2調査区第1遺構面完掘（北から）



SA14-P1~4（東から）



SP14-P1断面（東から）



SP14-P2断面（東から）



SP14-P3断面（東から）



SX15断面（西から）



SP17完掘状況（東から）



SP16 断面（南から）



SP18 断面（西から）



SX19 断面（南から）



SX20 断面（東から）



SX20 南側断面（東から）



SX20 北側断面（東から）



第2調査区第2遺構面完掘（北から）



SP21断面（東から）



SP22断面（東から）



第3調査区第1遺構面完掘（西から） 第3調査区第2遺構面完掘（西から） 第3調査区完掘（西から）



報告書抄録

ふりがな	まつのうちいせき							
書名	松ノ内遺跡							
副書名	多肥小学校校舎等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高松市教育委員会							
シリーズ番号	第208集							
編著者名	大迫 敏美							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2020年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘機関	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
松ノ内遺跡	香川県 高松市 多肥上町	37201		34° 29' 28"	134° 05' 17"	2018.7.1 ~2018.7.24 2018.8.1 ~2019.1.31 2019.7.1 ~2019.7.12	927.5m ²	多肥小学校 校舎等 建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
松ノ内遺跡	集落跡	古代～中世		溝、土坑、ピット、 性格不明遺構、噴礫		土師器 須恵器 陶器		
要約	今回の調査では古代から中世の遺構を検出した。多数の溝を確認し、その中でも大規模な溝を2条検出したが、1条は高松平野における条里型地割方向に合致しないが、再掘削が行われ、基幹水路として長い年月の利用が窺えるものであった。もう1条は高松平野における条里型地割方向に合致するが掘削範囲が狭小であるため、確定的な方位とは言えなかった。 よって、当該地では条里型地割の施工が他の地域よりも遅れる可能性が想定できる。							

多肥小学校校舎等建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

松ノ内遺跡

令和2年3月31日

編集　　高松市教育委員会
 高松市番町一丁目8番15号
 発行　　高松市教育委員会
 印刷　　(有)中央ファイリング